

## その他の文書⑫

(比内文書続き)

無理なる御願ひいたしません。私の子共三人御座りまし。長男ハ私家の相続人と御残し被下たし。残る二人ハ天へ差上まし故、どうぞ預り子一人と、私の子二人と寿命とつきかへが願ひたう御座り舛なれ共、寿命不足の時ハ願成就の上なれば、私の寿命も天へ差上申舛と、分を御立てなされで、一心不乱に御願なされました。誠に世上又と無ぎ次第で御座りまし故、神御受取となりて、すでに一命あやうぎ処」(35オ)

元の如くに全快になりましたそふて御座り舛。然ルによく考へて御ろうじませ。世の中に、我子程、可愛者は御座りましまい。子の為になら、我か命も忘るゝ程なるは親の心で御座り舛。只口でいへば、我子の命と他人の子の命と取かへと云ふ丈で御座り舛れど、中に人間心の及ぶ処では御座り舛しまい。其心天より見済になつて、如何にも此者こそ、三千世界の萬助けの土台となり、如何なる道も通つて呉れるであろうと見」(35ウ)

定めて、又拾年間、色々ためしになりましたと、天降りて後に神様より御咄で御座り舛た。しまして、先に天へ御上げに成る御子の内、安女様四才の御時に、ふつと病気の為めに御隠となりました。其時に教祖様、表面にわ御難有きの色をあらわし被下たれど、御心には天を拝して、御迎ひとり被下ましたが、御難有御座り舛と、只一心に御礼申に成ましたといふ。皆銘々の心なら、のとこすと、暑さ忘るゝた」(36オ)

とにて、必らず不足とか難き心か出来まするに、教祖様ニハ、更に左様な御心は御ざりませんだそうです。しまして、又三十六才の御時、安女様の魂を常女様と宿し込み、又三才にて、天へ迎ひ取りになりました。其時にも、先に変らぬ御心で御礼申に成ました。なせ御礼申になりましたなれば、我天へ差上たる子の迎ひ取りに成りたならば、預り子様ハ無病そくさいで生きながらへ被下に相違な」(36ウ)

きを御喜びに成りましたといふ。しまして後、神様の御咄の被下舛るには、預り子の為め、先の二人を天へ上たれど、二人一時に迎ひ取るは気の毒であつたニ依而、同じ魂を二度宿し込み、二度にして迎ひ取たと御咄して御座り舛した。しまして又同じ魂を、教祖様四十才の御時に御やとし込み御産み出しに成りましたが、小寒様で御座り舛そうです。此魂は神様深き因縁があるとの御咄して御座」(37オ)

ました。しまして或時、中山様の内方へ盗人か這入りましたか、然ルニ不幸にして、盗人か見付られ、下男がとらわれて、既に警察の手へ引渡そうと申ましたら、教祖様御聞になりまして、下男を押し留めて、其盗人に十分に道をさとし、以後ハ堅へいましめになりまして、其人に、何が如何程ほしくて御出に成つた、必ず不自由な処から出来心か出ましたのであろうと、御尋ねになつて、夫れたげ」(37ウ)

御やりになりましたそう。教祖様、後におしやれまするには、あれは、あの人のするのでない。不自由なのかするのである。あの人も御気の毒な御方じやと、道理を付けて、御憐みに成りましたそうです。総で教祖様万事道理を善き方へ付けて、敵を敵とせず、他人を他人と隔てなし。万事の行ひ我々の及ぶ処では御座り舛ぬ。他の事は推して知れるので御座り舛。然るに教

祖様四十才の御」(38オ)

年、即天保八年秋の内頃、長男の周治様、下男下女諸共に、田へ麦蒔の御働きに御出に成りました処か、ふと足か痛み、追々其痛み烈敷なりまして、田より下男に掛つて御帰りにになりました。其時周治様ハ十七才の御年で御座りましたそう。処が段々痛みます故、医沙よ薬となされたれど、中々なをりませぬ。夫故、若し神様の御咄めにもあらざるかと、竜田村の萩原市兵衛といふ」(38ウ)

山武士を願ひ、加地や祈禱をして御貰ひに成りました処か、追々能くなりました。しまして、夫より度々足痛みます故、其度毎に山武士を御願ひになりましたそう。後に神様御下りに成て御咄には、周治様の足の痛みが神様のふしん始めに、いんねんじやと、御咄で御座りましたそう。しまして、又教祖様四十一才の御時、則ち天保九年、戌の十月、又ふと長男周治様の」(39オ)

足が非常にいたみました。依而、又々例の如く山武士の市兵衛殿を願ひ、加地や寄せ祈禱をなされました。しまして、其時の御幣持は教祖様か変つて成されましたか、天保九年戌の十月廿四日朝の事で御座りましたそう。其祈禱をちなみとして、天の親様が御下りとなりました。夫故に教祖様無中となつて御仕舞なされました故、誠の神様トハつゆしらず、一家親」(39ウ)類よりて山武士に払ひよけの大祈禱を建て、御もらひになりました。なれとも少しも変わらず、教祖様無中の内より、おまへら少しもおとろく事はいらん。吾ハ誠の神なり。此度、日柄年限写り来て、人間助け一条の道を教へに天降りたり。いらざる祈禱する事いらん。加持や祈禱てのく神でない。美岐の身体をかりうけて、此屋敷の元のいんねんに依而、天降りたり。美岐の身体屋敷諸」(40オ)

共かりうけたし。若しかさゝるは、美岐の身体迎取り、屋敷諸共、断絶さすると、おつしやれました。然れ共、其時教祖様ハまだ御幼少の御子達四人、小かん様ハまた二才の乳呑み子で御座り舛れば、よう考へて御ろうじませ。何れの家も同じ事。乳呑子抱へて、四人の御子達なる母親を如何な神様の御願みとは雖も、かせましよふか、かせますまい。かよう銘々に取りて考へて見なさい。其」(40ウ)

時の夫善兵衛様の御心をくみて見て被下ませ。只口で申せば、是丈のこと。今になれば、此結構な神様と分て御座りますれど、其時ハ如何なるやら、とうなるやら。誠の神様やらしれませんのに、中に凡人の返事の出来る事では御座りませぬ。なれ共、善兵衛様も慈悲深き御方て故、乳呑子のあるにも不拘、我愛なる女房を、左様なら御使ひ被下と御約束なされました。しま」(41オ)

たならば、教祖様ハ元の通りに正気と御成り被下ました。しまして、明る天保九年戌の十月廿六日朝五つ時に、しゅんこくげん写り来て、天の照護、月様又照護日様、月日二神様御降り被下まして、此世初めだしの事、人間初めだしの御咄し、又此度人間助け一条の道を教へ被下舛た」(41ウ)

話はここまでであるが、このあとに「後のづゝき記条ス」として、次の文がある。

見済し御教祖様の御心か天の親様の御心に叶ふた、其心味を見て、三千世界の助けの雛形、土台と成し、天の親様に口が御座りません。夫故へ、なんば人間が助けと云ふても、口が無いから論とせません。只人間を論すにハ、水と火とで論とせば、人間悟りが付ず、心が要氣に成るのみじや。夫故、又神の残念顕る。神の残念顕らわれず、又人間の心、要くなる。要に要」(42オ)かそらて、暗き道に日々入て行て行でとうもならん。夫故、此度日柄年限来る得兼ね、御教祖様、神の社に貰受、三千世界、又と無き扶け一条の道を御付被下た仰言に、

と記され、なお「御教祖様御履歴聞考」としてメモ書きがあるが、その史実については、明らかに誤記であろうと思われる記述も多々あるので省略しておく。

なお、これ(整理番号⑤)とは別の、すなわち比内文書⑥として整理した「神様の御咄」がある。それは裏表紙見返しに「明治三十六年旧十月二十六日 御本部大祭参詣運際に 会長公より土産にて拝領ス 小林久太郎」と記されている。会長公が具体的に誰であるのかは、今のところ特定できないが、阿仁、あるいは湖東の、いずれかの会長より初代会長が戴いたものであろう。またその年代は⑤の2年後のもので、その内容は、⑤で途切れている話の続きも記されている。そこで、そのあとを⑥で補っておきたい。最後の箇所は重なるが、そこから翻刻しておく。

又、此度珍敷人間助け一条の御咄し被下には、さあへ〜此屋敷、元々のいねんを知るまい。最初此屋敷から人間を始め掛けたる地場じやで、人間最初産み出しハ九億九万九千九百九」(16オ)十九人の人数に、一人老年と定め、是ハ一世年限と思惑を建て是迄育て来た。夫れ人間を五分より産始め、九億九万年か間ハ、水中にて育て、五尺の身として岡へ引揚げ、六千年掛りて事物を教へ、三千九百九十九年、凡四千年程先から、最初人間造化の時、道具衆に使ふた八神の神魂を人間肉体と顕す。月日入込、種々様々の法を説き、不思議をあらわし、人間の心で育てて通りたるなり。月日ニハ如」(16ウ)

何おもへ共、月日には口かない。夫故、人間の心を助けるにハ、水と火とで知らしていたなれども、水と火とハ荒き者故、人間心荒立て、とうもならん。夫故に仏法とゆふ法を、八柱神を使い、月日入込み、人間心とらけの道を立てさしたなれ共、是を教へる者から崩して掛かる。是又どうもならん。夫故に、世界の人間が元のいねん、前生いねん、こしゆく先の成るいねんも、心一つのなすいねんと知らず、日二月二年々ニ」(17オ)暗き道ニ這入て行を、高さ天から見るに見兼ねて、此度日柄年限の来るを待兼て、元の屋敷のいねんの理を見すまして、天降りたり。又美岐の魂とゆふハ、元々此屋敷より、人間を始め産み出して呉れた伊邪那美の神魂を三味田の底き処に宿し込み、此屋敷のいねんの理を以て引寄せ、其行ひを見すまして居た。其言葉と行ひ天理に叶ひ、其心味ひ、堅きニ過ぎず、やわらかに過ぎず」(17ウ)

其心味ひたべ分けと、いねんといねんを見定めて天降りたり。さあ、此道は始めかけたらきりハない。月日の照す処ハ月日一目じや。如何な助けも教る。如何なる事も見定める。さあ

此道ハ高さ処へ神入込み、道を付れば、直くに付るなれども、高さ処より付れば、云わばつへいへしになる。夫では、心に真実の理が納らん、理が分らん。夫故、此度ハ底き谷底から道を付る。云ハ底き、谷にうづもれてある様な者をほりおこ」(18オ)

して、神か入込み手入れして引揚るのや。そごて棄り物をひらい揚る様なものやと、仰せで御座り舛そうな。其親様の御心を感じさして貰わねば、恩に恩が重る。如何な者も前生因縁と知りたる者かない。よう考へて御ろうじませ。又こし行先の理も分らん。依て日々を調べて置ねば成りません。又人一人助けさして貰ふのは神一人造らへて貰ふ御心に成りてもらわな成りません。そこで神様の御心にハ、なんじゆ助け第一、百姓助」(18ウ)

け第一。帯屋ほうそ是第一。親様の深き御慈悲を以て、底き谷底から引揚げて切名<説明>さして被下て、高さ処からハ、神様連て降り被下、世界六く六間処との道を付けて不病不弱の道を付け、楽みづくめの道を連れて通りたき御思召であらわれ被下ました。そこで此度ハ底き処から御助け始め被下、夫故に我にも底き処に落到や、世界なんぎ分らん。高さ処に居て、口で事凶斗りして居てハ、人をすくいあけるとゆう訳には行かん。棚に居てハ物ハひ」(19オ)

らゑん。口斗でハ切名ハ出来ん。切名出来にや天の授けも御座りません。依而、神様教祖様に貧乏せい、物を施せと、十分難義せいと御指図被下ました。元より教祖様ハ何一つとして、人の云ふ事さいも、そむきに成つた事ハ御座りません御方で御座り枡。しまして人に物をやる事ハ御好きて御座り舛たそうな。依而、神様の仰を守り、御自分の衣装から先に御施しになりました。夫も人に礼を受けてハ天に受取りて被下る処が」(19ウ)ないとして、人からハ礼を受けぬ様に、いろへ〜と工夫を、御めくらすに成りましたそうです。そこで銘々の心とは大井な相違で御座り舛。総て世の中の人ハ、人の善き事にも、我の行ひの様な顔もし、或ハ善き事をたまへ〜しても、向ふより礼がうすかつたが、言葉づかいが悪かつたりすれば、不足たらへ〜、又悪しき故ハ、成る丈人にねつり付けたき心持ち、何と教祖様の御心とはたいした違ひではありませんか。よう御思案して見てごらん。私」(20オ)

始め恥ヶ敷次第御座り舛。

しまして、段々ニ衣類も施して御仕舞に成り、其衣装も固より御聞きの通り、仰山持て御越になり、教祖様ハ常ニ、ハでいなものは大層御きらいで、柄のはでないな者ハ御きらいで、極地蜜な者が御好きて、若き時の物や絹物類ハ今夕手も通さず、仕付も取らんのを沢山御施しになり舛たそうな。夫れより考へて御ろうじませ。女ハ三界に家なし。衣装が家じやとゆうハ女の常、其上、女の」(20ウ)

子も沢山御座り舛に、教祖様じやとゆうたとて、同じ人間じや。皆心にハ、同じ事なれ共、神様の仰せを背かず、只しなを、をいて心とし、人を助けたき御思召の御心一つで御通り被下、衣装一切施しになりましたら、神様又田地田畑すつかり施せ、早く貧乏せいとの仰に、又々田地田畑すつかり施しに成りました。